

高齢者の外出行動における 「慣れ」や「諦め」に関する研究

鈴木 雄¹・日野 智²・小島 遼太郎³

¹正会員 秋田大学大学院理工学研究科 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)

E-mail:yusuzuki@gipc.akita-u.ac.jp

²正会員 秋田大学大学院理工学研究科 (〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1)

E-mail:hino@gipc.akita-u.ac.jp

³正会員 栃木県栃木土木事務所企画調達課 (〒328-0032 栃木県栃木市神田町6-6)

E-mail:kojimar02@pref.tochigi.lg.jp

本研究では、高齢者の外出活動における「慣れ」や「諦め」について分析を行った。各外出活動において、自身の希望以下であるにも関わらず、それに不満を感じない高齢者が存在する。その要因として「慣れ」や「諦め」が影響している可能性が示された。普段の生活において予想よりも多くの「慣れ」や「諦め」が存在していることが明らかとなった。「慣れ」や「諦め」を構成する因子として「活動能力に関する諦め」「活動欲求に関する慣れ」「生活の質に関する諦め」で解釈されることを示した。これらの「慣れ」や「諦め」の因子と家族と同居していた履歴などの属性との関係を示した。高齢者の外出に関する意識調査では「慣れ」や「諦め」による影響を考慮しなければならない。また、高齢者の「慣れ」や「諦め」が生じないような施策が求められる。

Key Words : elderly people, going out activite, habituation and resignations

1. はじめに

都市・交通施策の評価を行うにあたり、住民への意識調査から施策への満足度などの非観測要因を正確に把握することは重要である。しかし、過去の調査結果をみると、高齢層において過剰に満足度が高くなる傾向がある。十分な外出ができていない人であっても外出の満足度に「満足」と回答する場合がある。例えば、鈴木ら¹⁾の研究で示された、年齢と外出頻度との関係を図-1に示す。

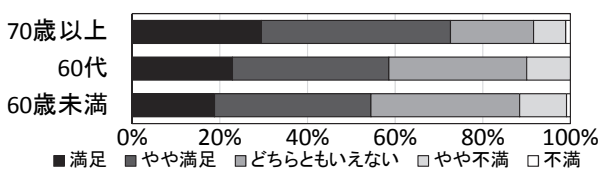
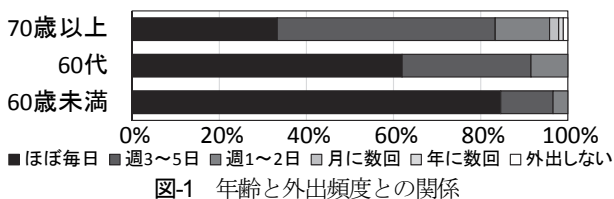


図-2 年齢と外出頻度への満足度との関係

また、年齢と外出に対する満足度との関係を図-2に示す。外出頻度が「週3日以上」の人の割合をみると、「70歳以上」が83.3%、「60代」が91.5%、「60歳未満」が96.6%となり、高齢なほど頻度が下がっている。一方で外出に対する満足度で「満足、やや満足」の人の割合をみると、「70歳以上」が72.6%、「60代」が58.6%、「60歳未満」が54.5%となり、高齢なほど満足度が上がっている。つまり、高齢になるほど外出頻度が下がっているにもかかわらず、満足度は上がっている。本研究では、このような現象が高齢者の「慣れ」や「諦め」により起こるものと予想した。「慣れ」は、交通環境の低下や自身の外出能力が低下しているにも関わらず、その状況が長く続くにつれて不便な環境に慣れてしまうことが考えられる。「諦め」は、高齢者なのだから、外出できないのは仕方がないなどといった諦めの心理が働くこと考えられる。

高齢者の外出行動に「慣れ」や「諦め」が起こることの問題点としては大きく2つ挙げられる。1つ目は、前述した意識調査の結果が正確に得られないことである。例えば、満足度の結果を一つの指標とした場合、施策を過大に評価してしまう可能性がある。2つ目は、「慣れ」

や「諦め」により、高齢者自身の外出頻度などが急激に下がることである。渡辺²⁾らの調査では、閉じこもりと要介護の発生関係について報告されている。これによると、非閉じこもり高齢者の30ヶ月後の要介護割合が7.4%なのに対し、閉じこもり高齢者の30ヶ月後の要介護割合が25.0%となっている。つまり、自宅に閉じこもることにより急激に要介護状態になることが示されている。高齢者に対し、「慣れ」や「諦め」を起こさないことが重要である。

本研究では、高齢者の外出行動に対する「慣れ」や「諦め」に着目した。高齢者の「慣れ」や「諦め」の実態把握と、それらが外出行動に与える影響の把握や、「慣れ」や「諦め」の発生要因について分析を行うことを目的とする。

高齢者の外出行動、交通環境に対する「慣れ」や「諦め」に関する既往の研究はほとんどみられない。高齢者の都市・交通分野以外の「慣れ」や「諦め」の研究では、以下のようなものがある。

白萩³⁾は、ドライバーの経路選択や運転操作に関する慣れについて分析を行っている。また、杉邑・上野⁴⁾は、ソフトウェア利用時のユーザインターフェイスに対する慣れについて分析を行っている。堀内⁵⁾は、青年期の諦めに関する分析を行っている。その結果、青年期の諦めについて、肯定的に捉えることで本来感を高めることを示している。菅沼⁶⁾は、青年期の諦めについての構造を示している。これにより、諦めることは否定的な側面だけでなく、建設的な側面を有していることを示している。

2. 「慣れ」や「諦め」に関する意識調査

本研究では、高齢者の外出行動における「慣れ」や「諦め」の実態の把握のために、秋田県秋田市の高齢者を対象に意識調査を実施した。秋田県は全国でも最も高齢化が深刻な県である。平成29年12月時点での秋田市の総人口に占める65歳以上人口の高齢化率は30.2%となっており、今後も増加することが推計されている。また、秋田市の路線バスの輸送人員は年々減少しており、採算性の低い路線については廃止や統合が行われている。路線バスの利便性が低くなることに対して「慣れ」や「諦め」が発生することも考えられる。

意識調査の概要を表-1に示す。意識調査では、個人属性、普段の生活の満足度、各活動をやめてからの年数、65歳の時と比較した外出行動の変化と慣れや諦め、生活における慣れや諦め、外出の各価値における重要度の認識と達成状況、老研式活動能力指標、各施策に対する関心度などについて質問を行っている。

表-1 意識調査の概要

調査票配布概要			
調査票配布対象：秋田市在住の65歳以上の高齢者			
調査票配布日：平成29年12月15日～16日			
調査方式：直接投函・郵送回収方式			
配布地区：旭川、保戸野、南通、御野場、寺内			
配布地区	65歳以上人口	65歳以上人口割合	回収票数(回収率)
旭川	762	32.6%	106票(35.3%)
保戸野	1,735	31.8%	68票(22.7%)
南通	975	27.0%	65票(21.7%)
御野場	1,962	28.6%	80票(26.7%)
寺内	2,664	30.6%	77票(25.7%)
全体			396票(26.4%)
調査内容			
個人属性			
-性別 -年齢 -職業 -世帯構成 -健康状態			
-65歳の時と比較した健康状態			
-普段の趣味を行ううえでの不便			
-普段の買い物を行ううえでの不便			
-自家用車の所有 -普段の利用施設 など			
普段の生活の満足度			
-外出頻度の満足度 -外出範囲の満足度			
-買い物する店舗数の満足度			
-趣味娯楽内容の満足度 -趣味娯楽頻度の満足度			
-交通手段の満足度 -買い物の方法に関する満足度			
各活動をやめてからの年数			
-自動車を運転しなくなってからの年数			
-仕事をやめてからの年数			
-趣味娯楽が十分にできなくなってからの年数			
-健康のための運動ができなくなってからの年数			
-一人で生活するようになってからの年数			
-階段の上り下りがつらくなってからの年数			
65歳の時と比較した外出行動の変化と慣れや諦め			
-外出頻度 -外出範囲 -交通手段 -買い物頻度			
-買い物する店舗数 -趣味娯楽の頻度			
生活における慣れや諦め			
-慣れ：6項目（購入意欲の低下など）			
-諦め：13項目（趣味娯楽の時間の低下など）			
外出の各価値における重要度の認識と達成状況			
-好きな時に外出ができること			
-好きな場所に外出ができること			
-他人とコミュニケーションが取れること			
-自宅ではできない体験ができること			
-自身で手に取り購入できること			
-日常生活が充実したと感ずること			
-外出先までの移動が楽しいこと			
老研式活動能力指標			
-手段的自立：5項目			
-知的能動性：4項目			
-社会的役割：4項目			
各施策に対する関心度			
-免許返納者への支援 -コインバス事業			
-デマンドバス -買い物送迎バス -移動販売			

3. 「慣れ」や「諦め」の要因

(1) 外出活動の希望と満足度の関係

高齢者において、外出活動が希望以下であるものの、その状況に不満を持っていない場合がある。その理由として、現状の生活への「慣れ」や、自身の活動に対する「諦め」が挙げられる。まずは、外出活動と満足度の関係について分析を行うことで、上述した関係性の把握を行う。外出頻度を例とした、外出活動の希望と満足度の関係の分析フローを図-3に示す。

分析フローとして、まずは、外出頻度に対し自身の「希望以上」か「希望未満」であるのかについて分類を行う。本分類は「現在の外出頻度」と「希望の外出頻度」の差分から求めている。さらに、その外出頻度が「不満」なのか「不満以外なのか」について分類を行う。これらの分類により、「希望未満で不満を持っている」「希望未満なのに不満を持っていない」「希望以上なのに不満を持っている」「希望以上なので不満がない」の4つのグループに分けられた。外出頻度に対して「希望未満」の人は全体の29.1%である。さらに「希望未満」の人の中で、外出頻度に対して「不満」を持っているのが14.5%、「不満以外」なのが76.4%となっている。自身の外出に対して「希望未満」なのにもかかわらず、不満を持っていない人が多数なのが確認できる。

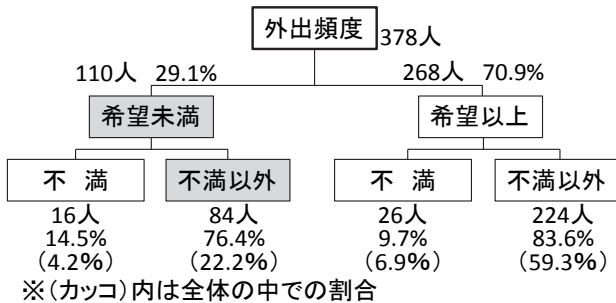


図-3 外出行動の希望と満足度の関係フロー

表-2 外出行動の希望と満足度の関係

外出活動	希望	人数	割合1	満足度	人数	割合2	割合3
外出頻度	希望以下	110	29.1%	不満	16	14.5%	4.2%
				不満以外	84	76.4%	22.2%
希望通り	希望通り	268	70.9%	不満	26	9.7%	6.9%
				不満以外	224	83.6%	59.3%
利用店舗数	希望以下	75	20.3%	不満	25	33.3%	6.8%
				不満以外	45	60.0%	12.2%
希望通り	希望通り	294	79.7%	不満	26	8.8%	7.0%
				不満以外	248	84.4%	67.2%
自身での買い物	希望以下	45	11.8%	不満	15	33.3%	3.9%
				不満以外	26	57.8%	6.8%
希望通り	希望通り	335	88.2%	不満	33	9.9%	8.7%
				不満以外	275	82.1%	72.4%
趣味娯楽頻度	希望以下	90	23.9%	不満	30	33.3%	8.0%
				不満以外	54	60.0%	14.4%
希望通り	希望通り	286	76.1%	不満	26	9.1%	6.9%
				不満以外	235	82.2%	62.5%

※「割合1」は各外出活動の中での「希望以下」「希望通り」の割合
 ※「割合2」は各希望の中での「不満」「不満以外」の割合
 ※「割合3」は各外出活動全体の中での割合

同様に、「買い物における利用店舗数」「自身で十分に買い物を行っているかどうか」「趣味や娯楽の頻度」についても分析を行った。それらの結果を表-2に示す。

それぞれの外出活動に対して「希望未満」の中で「不満以外」の人の割合をみると、「外出頻度」で76.4%、「利用店舗数」で60.0%、「自身での買い物」で57.8%、「趣味娯楽頻度」で60.0%となっている。

(2) 「慣れ」と「諦め」の項目

高齢者の「慣れ」と「諦め」がどのような要因により構成されているかを把握するために本研究では「慣れ」

表-3 「慣れ」「諦め」の設定と該当率

諦めの設問	該当率
趣味や娯楽に時間を費やせていないが、それは仕方がないことだと思う	60.7%
以前と比べて激しい運動ができなくなったが、それは仕方がないことだと思う	84.8%
友人や知人と多くの時間を過ごせていないが、それは仕方がないことだと思う	71.5%
現状、公共交通の整備に関して不満があるが、それは仕方がないことだと思う	53.7%
様々なことにチャレンジしてみたいが、年齢のせいで諦めてしまうのは仕方がないことだと思う	62.2%
年々、他の人とコミュニケーションが少なくなってきたことは、仕方がないことだと思う	64.6%
スマートフォンなどの新しいものをうまく利用できないことは、仕方がないことだと思う	70.3%
身体機能が低下して日常生活の様々なことが不自由になることは、仕方がないことだと思う	68.5%
階段の上り下りを避けるようにしていることは、仕方がないことだと思う	43.6%
家からなかなか外出しなくなってしまうことは、仕方がないことだと思う	34.2%
若いころと比べて生きがいが減ってきてしまうことは、仕方がないことだと思う	52.1%
生活にメリハリが無くなってきたことは、仕方がないことだと思う	46.2%
新聞や本など、文字が読みにくくなってしまうことは仕方がないことだと思う	65.5%
慣れの設問	該当率
年々、自分の欲しいものを買いたい気持ちが低下してきているが、現在の生活に慣れているため、不便に感じない	81.1%
毎日が同じことの繰り返しになってきているが、その生活に慣れてきてしまっているため、不便に感じない	80.5%
やりたいことや行ってみたい場所はあるが、生活に必要不可欠ではないので不便に感じない	73.6%
外出する際の交通手段が不便であるが、現在の生活に慣れているため、大きな問題だと感じない	62.3%
もっと旅行などの遠出の機会を増やしたいが、生きる上で絶対に必要なものではないために、後回しになっている	61.9%
普段家では食べることのできない料理を食べたいが、普段の食事でも問題が無いためなかなか行こうと思わない	55.2%

と「諦め」の一般的な項目について質問を行っている。

「慣れ」に関しては6項目、「諦め」に関しては13項目としている。「慣れ」と「諦め」の項目は、秋田大学の計画系研究室の学生7名によりブレインストーミング法により選定・抽出を行っている。「慣れ」や「諦め」の項目とそれぞれの設問の該当率を表-3に示す。

「慣れ」と「諦め」の項目において該当率の高いものをみると、「以前と比べて激しい運動ができなくなったが、それは仕方がないことだと思う」で84.8%、「年々、自分の欲しいものを買いたい気持ちが低下してきているが、現在の生活に慣れているため、不便に感じない」で81.1%、「毎日が同じことの繰り返しになってきているが、その生活に慣れてきてしまっているため、不便に感じない」で80.5%となっている。該当率の低いものをみても、「家からなかなか外出しなくなってしまうことは、仕方がないことだと思う」で34.2%、「階段の上り下りを避けるようにしていることは、仕方がないことだと思う」で43.6%、「生活にメリハリが無くなってきてしまうことは、仕方がないことだと思う」で46.2%となっており、低くない該当率となっている。事前に想定していたよりもかなり多くの高齢者に「慣れ」や「諦め」が生じていることが明らかとなった。

(3) 「慣れ」と「諦め」の因子

高齢者の「慣れ」や「諦め」がどのような因子で構成されているかを把握するために、本研究では因子分析を行った。「慣れ」や「諦め」の項目で因子分析を行った

表4 「慣れ」や「諦め」の因子

因子	設問	因子1	因子2	因子3
活動能力に関する諦め	身体機能低下への諦め	0.67	-0.01	0.04
	交流機会減少への諦め	0.59	0.02	0.07
	激しい運動への諦め	0.58	-0.01	-0.10
	チャレンジすることへの諦め	0.58	0.00	0.05
	階段の上り下りへの諦め	0.55	-0.07	0.18
	IT技術の利用への諦め	0.52	0.16	-0.06
	友人と過ごす時間減少への諦め	0.47	0.09	0.11
活動欲求に関する慣れ	趣味の時間減少への諦め	0.46	0.04	0.18
	同じ生活の繰り返しへの慣れ	0.13	0.71	-0.11
	購買意欲低下への慣れ	0.16	0.64	-0.07
	活動欲求低下への慣れ	0.07	0.62	0.03
	外食機会の減少への慣れ	-0.20	0.50	0.35
生活の質に関する諦め	外出の際の交通手段への慣れ	-0.06	0.47	0.13
	生活のメリハリ減少への諦め	0.23	-0.02	0.64
	遠出の現象への慣れ	-0.13	0.31	0.46
	生きがい減少への諦め	0.35	-0.01	0.46
	読み書き能力低下への諦め	0.09	0.00	0.42
その他	外出行動低下への諦め	0.35	-0.07	0.41
	交通整備への諦め	0.25	0.07	0.13

表5 「慣れ」や「諦め」の因子と外出満足度との関係

	活動能力の諦め		活動欲求への慣れ		生活の質の諦め	
	不満	不満以外	不満	不満以外	不満	不満以外
外出頻度	0.82	0.69	0.63	0.74	0.81	0.52
利用店舗数	0.83	0.78	0.62	0.68	0.71	0.61
自身での買い物	0.70	0.88	0.67	0.76	0.66	0.75
趣味娯楽頻度	0.66	0.73	0.67	0.73	0.55	0.63

結果を表-4に示す。

因子分析は、各設問間に関連性がまったくないとはいえないため、プロマックス法による斜交回転にて行った。これらの分析の結果、固有値1.0以上の3因子が抽出された。因子負荷量から判断して、「第1因子」を「活動能力に関する諦め」、「第2因子」を「活動欲求に関する慣れ」、「第3因子」を「生活の質に関する諦め」とした。高齢者の「慣れ」や「諦め」を構成する因子として、こちら3因子から解釈されることが明らかとなった。

因子分析により抽出された3因子と、外出活動の満足度との関係について分析を行う。これらの関係について表-5に示す。「慣れ」や「諦め」の得点として、因子分析により抽出された各因子の合計の平均(該当:1, 非該当:0)を項目数で除したものをを用いる。これらの得点は、点数が高いほど、「慣れ」や「諦め」の度合いが高いことを示す。表-5では、各活動に対して「希望未満で不満を持っている」「希望未満なのに不満を持っていない」それぞれの人の「慣れ」「諦め」の得点を示す。

例えば「外出頻度」についてみると、「活動欲求への慣れ」において、「希望未満で不満を持っている」人の得点が0.63なのに対し、「希望未満なのに不満を持っていない」人が0.74と高くなっている。つまり、「活動欲求に関する慣れ」により、外出頻度が自身の希望以下なものにも関わらず、それを不満に感じていない可能性がある。同様に「希望未満で不満を持っている」人よりも、「希望未満なのに不満を持っていない」人の方が、「慣れ」や「諦め」の得点が高い項目をみると、「利用店舗数」で「活動欲求に関する慣れ」、「自身での買い物」と「趣味娯楽の頻度」ですべての項目となっている。

(4) 属性による「慣れ」と「諦め」

「慣れ」や「諦め」は属性の違いにより異なると考えられる。そこで本研究では、属性の違いによる「慣れ」や「諦め」の得点について分析を行う。各属性による「慣れ」や「諦め」の得点を表-6に示す。

「性別」では、「生活の質に関する諦め」で「女性」の方が得点が高い。「年齢」では、すべての項目において高齢なほど得点が高い結果となった。「世帯構成」では、「一人暮らし」の人ですべての項目が高い結果となった。「歩行可能距離」に関しては、距離が短いほど得点が高い傾向にはあるが、「活動欲求に関する慣れ」に関してはその傾向に当てはまらず、今後の追加分析が必要である。「交通手段」では、「自動車」「バスのみ」「送迎のみ」の順に得点が高くなっており、自由度が低い交通手段しか持たない高齢者にとって「慣れ」や「諦め」が大きくなることが示された。「外出頻度」では、全体的に頻度が低いほど得点が高くなる傾向にある。

表-6 属性と「慣れ」や「諦め」の得点の関係

属性		活動能力 諦め	活動欲求 慣れ	生活の質 諦め
性別	男性	0.651	0.702	0.488
	女性	0.646	0.722	0.544
年齢	65-74歳	0.540	0.651	0.450
	75-84歳	0.755	0.764	0.557
	85歳以上	0.852	0.805	0.705
世帯構成	夫婦	0.612	0.684	0.454
	多世代	0.672	0.709	0.548
	一人	0.716	0.777	0.613
歩行可能	1000m-	0.537	0.721	0.407
	500-1000m	0.631	0.652	0.519
	100-500m	0.756	0.717	0.569
	-100m	0.754	0.786	0.651
交通手段	自動車	0.557	0.670	0.447
	バスのみ	0.841	0.773	0.667
	送迎のみ	0.856	0.840	0.667
外出頻度	ほぼ毎日	0.616	0.675	0.439
	週3-5日	0.596	0.714	0.471
	週1-2日	0.725	0.718	0.609
	月に数日	0.743	0.747	0.705
	ほぼなし	0.859	0.900	0.760
運転履歴	現在運転	0.558	0.670	0.499
	1-5年前	0.828	0.767	0.708
	5年以上前	0.698	0.733	0.400
	なし	0.783	0.764	0.602
仕事履歴	在職中	0.607	0.723	0.433
	1-5年前	0.589	0.663	0.424
	6-10年前	0.550	0.656	0.492
	11年以上前	0.716	0.717	0.558
同居履歴	現在同居	0.631	0.682	0.483
	1-5年前	0.669	0.751	0.568
	6年以上前	0.760	0.791	0.657

「運転履歴」では、「1-5年前まで」の人で得点が高い。これは、「5年以上前」の人は、すでに他の交通手段を使っており、そちらの生活に慣れていることが考えられる。自動車の運転ができなくなった直後の方が「諦め」が多く起こることが予想される。「仕事履歴」では、特徴的な傾向はみられない。「同居履歴」では、同居できなくなってからの期間が長いほど得点が高い傾向にある。

(5) 老研式活動能力指標と「慣れ」と「諦め」の関係

本研究では、老研式活動能力指標と「慣れ」「諦め」の関係について分析を行う。老研式活動能力指標⁷⁾⁸⁾とは、手段的自立・知的能動性・社会的役割の各質問に対するスコアから高齢者の自立度を測る指標である。老研式活動能力指標は手段的自立5点、知的能動性4点、社会的役割4点の計13点で評価される(表-7)。

老研式活動能力指標と「慣れ」「諦め」との関係を表-8に示す。老研式活動能力指標の各設問に当てはまる人

表-7 老研式活動能力指標の項目

手段的自立			
バスや電車を使って一人で外出ができますか?			
日用品の買い物ができますか?			
自分で食事の用意ができますか?			
請求書の支払いができますか?			
銀行預金、郵便貯金の出し入れが自分でできますか?			
知的能動性			
年金などの書類が書けますか?			
新聞を読んでいますか?			
本や雑誌を読んでいますか?			
健康についての記事や番組に関心がありますか?			
社会的役割			
友人の家を訪ねることがありますか?			
家族や友人の相談に乗ることがありますか?			
病人を見舞うことがありますか?			
若い人に自分から話しかけることがありますか?			

表-8 老研式活動能力指標と「慣れ」「諦め」の関係

老研式活動能力指標		活動能力 諦め	活動欲求 慣れ	生活の質 諦め
バスや電車での一人での外出	○	0.634	0.708	0.494
	×	0.875	0.736	0.746
日用品の買い物	○	0.642	0.708	0.502
	×	0.885	0.747	0.773
自分で食事の用意	○	0.642	0.712	0.505
	×	0.735	0.682	0.588
請求書の支払い	○	0.643	0.704	0.504
	×	0.953	0.911	0.889
銀行預金、郵便貯金の出し入れ	○	0.642	0.705	0.504
	×	0.813	0.776	0.682
年金などの書類の記入	○	0.638	0.703	0.500
	×	0.862	0.809	0.727
新聞を読んでいる	○	0.652	0.709	0.514
	×	0.617	0.713	0.500
本や雑誌を読んでいる	○	0.637	0.696	0.500
	×	0.780	0.839	0.640
健康についての記事や番組への関心	○	0.649	0.707	0.507
	×	0.650	0.750	0.613
友人の家を訪ねる	○	0.615	0.688	0.467
	×	0.698	0.741	0.572
家族や友人の相談に乗る	○	0.632	0.693	0.492
	×	0.748	0.784	0.623
病人を見舞うことがある	○	0.641	0.697	0.478
	×	0.670	0.738	0.598
若い人に自分から話しかける	○	0.627	0.679	0.477
	×	0.720	0.798	0.622

を「○」、当てはまらない人を「×」とした。「○」の人と「×」の人とで「慣れ」や「諦め」の得点を比較する。例えば、「若い人に自分から話しかけることがありますか?」では、「活動能力の諦め」「活動欲求の慣れ」「生活の質の諦め」の得点が「○」ではそれぞれ、0.627, 0.679, 0.477であるのに対し、「×」では、0.720,

0.798, 0.622となっている。また、「本や雑誌を読んでいますか?」では、「活動能力の諦め」「活動欲求の慣れ」「生活の質の諦め」の得点が「○」ではそれぞれ、0.637, 0.696, 0.500であるのに対し、「×」では、0.780, 0.839, 0.640となっている。このように活動能力と「慣れ」「諦め」の関係がみられる項目がある。その一方で、「新聞を読んでいますか?」では、「活動能力の諦め」「活動欲求の慣れ」「生活の質の諦め」の得点が「○」ではそれぞれ、0.652, 0.709, 0.514であるのに対し、「×」では、0.617, 0.713, 0.500となっており、「○」と「×」とで明確な差がみられない。老研式活動能力指標の項目においても、「慣れ」や「諦め」との関係に差があることがわかる。

4. おわりに

本研究では、高齢者の外出活動における「慣れ」や「諦め」の関係について分析を行った。本研究により明らかとなった点について以下に示す。

- (1) 高齢者の外出活動において「外出頻度」「買い物の利用店舗数」「自身で十分な買い物を行っているかどうか」「趣味や娯楽の頻度」において、希望よりも少ないにも関わらず、それに不満を抱いていない高齢者の存在について明らかとした。
- (2) 「慣れ」や「諦め」として、「慣れ」6項目、「諦め」13項目を設定し、それぞれについて質問を行った。その結果、「毎日が同じことの繰り返しになってきているが、その生活に慣れてきてしまっているため、不便に感じない」や「以前と比べて激しい運動ができなくなったが、それは仕方がないことだと思う」などの多くの項目について、当てはまっている高齢者が多数であった。予想よりも多くの「慣れ」や「諦め」が存在していることが明らかとなった。
- (3) 「慣れ」や「諦め」の項目において因子分析を行い、「慣れ」や「諦め」が「活動能力に関する諦め」「活動欲求に関する慣れ」「生活の質に関する諦め」の因子で構成されることが明らかとなった。また、それらの「慣れ」や「諦め」に関する因子が、各外出活動において、希望を満たしていないにも関わらず不満を抱かないこと

に影響している可能性があることを示した。さらに、普段の交通手段において「バスのみ」や「送迎のみ」の高齢者は「慣れ」や「諦め」が大きいことなど各属性との関係性や、「慣れ」や「諦め」と老研式活動能力指標との関係を示した。

本研究では、高齢者の外出に関する満足度調査において、各満足度を過大に評価してしまう可能性がある点、高齢者の外出においては「慣れ」や「諦め」を起こさせない工夫が必要である点を問題提起とした。今後の課題としては、「慣れ」や「諦め」の項目の再検討や、「慣れ」や「諦め」が発生する要因の詳しい分析、「慣れ」や「諦め」が醸成される過程などについて分析を行うことである。

参考文献

- 1) 内閣府：平成 27 年度版高齢社会白書，http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html，2016.04.05 閲覧
- 2) 真坂美江子，加藤研二，近藤光男，奥嶋政嗣：地方都市健康 MM における行動の習慣性に着目した環境・健康促進効果の比較，土木学会論文集 D3（土木計画学），Vol.69 No.5，pp.57-65，2014.
- 3) 谷本圭志：地方における高齢者の外出手段と機能的健康の維持に関する実証分析，土木学会論文集 D3（土木計画学），Vol.70 No.5，pp.395-403，2014.
- 4) 張峻屹，小林敏生：健康増進に寄与するまちづくりのための健康関連 QOL の調査および因果構造分析，都市計画論文集，Vol.47 No.3，pp.277-282，2012.
- 5) 倉持裕彌，谷本圭志：中山間地域における高齢者の買い物行動と健康維持に関する実証分析，都市計画論文集，Vol.50 No.3，pp.1281-1288，2015.
- 6) 柳原崇男：高齢者の外出頻度から見た日常生活活動能力と移動手段に関する考察，土木学会論文集 D3（土木計画学），Vol.71 No.5，pp.459-465，2015.
- 7) 古谷野亘，柴田博，中里克治，芳賀博，須山靖男：地域老人における活動能力の測定－老研式活動能力指標の開発－，日本公衆衛生雑誌，Vol.34 No.3，pp.109-114，1987.
- 8) 古谷野亘，柴田博：老研式活動能力指標の交差妥当性－因子構造の普遍性と予測的妥当性，老年社会科学，Vol.14，pp.34-42，1992.

(2018.4.20受付)

A STUDY ON HABITUATION AND RESIGNATION IN THE GOING OUT ACTIVITY OF ELDERLY PEOPLE

Yu SUZUKI, Satoru HINO and Ryotaro KOJIMA